國學院大學学術情報リポジトリ

# Matsuura Takeshiro 's Journey in the Twelfth Year of Meiji : Regarding the Relationship with the Antiquarians



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: Uchikawa, Takashi<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000698 |

# 松浦武四郎明治十二年の旅
## —好古家とのネットワークをめぐって—

内川隆志

### はじめに

平成二十一（二〇〇九）年、東京世田谷に所在する静嘉堂文庫で、幕末から明治を生きた好古家松浦武四郎（一八一八—一八八八）の実像を具体的に明らかにできる新たな資料が出現した。筆者は、同年より公益財団法人静嘉堂のご理解、ご協力の下これらの資料整理をおこない、平成二十五（二〇一三）年に目録を刊行。[1] 加えて同年十月に実施した静嘉堂文庫美術館での展示によって、このコレクションが世に知られるようになった。[2] 研究当初からの課題として、武四郎コレクションを核にした好古家ネットワークの分析を通して近代博物館創設の揺籃期において、文化財行政制度の構築に多大なる影響を及ぼした幕末維新期から続く好古家の活動に関して考究することをあげてきた。近代博物館制度、文化財保護制度の確立には該期を生きた数多の好古家たちの知識と協力なくして実現できるものではなかったからである。これは、近代博物館形成史、文化財行政史のみならず、揺籃期におけるわが国の人文科学そのものの成り立ちを考える上でも重要な視点である。加えて、彼らに影響を与えた外国人の存在があった事についても言及し、平成

二十七（二〇一五）年には、武四郎と古物を通じて交流したH・v・シーボルトと父F・f・v・シーボルト（Philipp Franz von Siebold）等のコレクションを有する欧米の研究者を招聘し、よりグローバルな視点で在外日本文化財を考える国際シンポジウムを開催した。[3] 平成二十八（二〇一六）年には、オランダ・ライデン民族学博物館に収蔵されているシーボルトコレクションの資料調査を敢行し、その実像に迫ることが出来たのである。[4] これらの研究を土台に、平成二十九年（二〇一七）から令和元（二〇一九）年まで推進してきた研究「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」では、日本近世史・日本近代史・ヨーロッパ近代史・ヨーロッパ考古学・中国考古学・日本考古学・博物館学・文化財学等の多様な専門家による研究体制を整え、総合的観点から近世後期の「物産会」から近代博物館制度・文化財行政の構築に到る歴史的・人的基盤を探り、好古家蒐集古物の調査・研究と国内外における現地調査を敢行するなど、より広範に好古家ネットワークの研究を推進した。[5]

本稿では幕末維新期の好古家として活躍した松浦武四郎のコレクション形成の一端について明らかにしたいと思う。特に今回は、現存する明治十二（一八七九）年から明治二十（一八八七）年まで慣例とした毎年の旅で交流した内容を記した稿本類[6]の内、明治十二（一八七九）年の『己卯記行』に記された各地の好古家との交流や記録された古物についてその内容を明らかにするものである。

## 一　好古家松浦武四郎が生きた幕末維新期の世相と文化財保護

明治新政府は、「王政復古」「祭政一致」の理想をかかげ、その実現のため神道国教化の方針を採用し神仏分離令を発令した。これによって神仏習合の廃止、神体として仏像の使用禁止、神社からの仏教的要素の払拭などが徹底され、仏像・仏具の破壊などの暴挙たる廃仏毀釈運動が起こったのである。特に明治維新を主導した諸藩では強力な廃仏毀釈が行われ、あらゆる仏教美術が破壊された。慶応四（一八六八）年四月一日、比叡山麓坂本の日吉社へ暴徒が押し寄せ、神殿に侵入、仏像・仏具・経典など一二四点に及ぶ仏教美術を破壊したのが廃仏毀釈の最初の暴挙とされる。[7] 薩摩藩では寺院一六一六寺が廃され、還俗した僧侶は二九六六人にのぼる。そのうちの三分の一は軍属となったため、寺領から没収された財産や人員が軍に回されたと

言われ、美濃国苗木藩では、領内の全ての寺院・仏壇・仏像が破壊された。法隆寺に匹敵する寺領を誇った奈良県天理市に所在した永久二（一一一四）年創建の内山永久寺は、伽藍もろとも完全に廃絶し、寺内にあった仏教美術は、破却、散逸の憂き目にあい、両部大経感得図（藤田美術館）など、その一部は流出し、現在国内外の美術館等で確認できる。また、平等寺（大神神社別当寺）、大御輪寺（大神神社神宮寺）、白雲寺（京都愛宕神社神宮寺）中禅寺（筑波山神社関連寺院）なども廃寺に追い込まれ、上野東照宮本地塔・鶴岡八幡宮大塔・久能山東照宮五重塔・北野天満宮宝塔・石清水八幡宮大塔なども破却された。興福寺でも全ての僧侶が神職に就き、自らが仏像や伽藍を破壊し、五重塔はわずか二五円ほどで売りに出されたが、取り壊しによる延焼を恐れた近在住民の反対にあって難を逃れている。

一方、明治四（一八七一）年八月二九日、廃藩置県が決定すると社会は大混乱となり、藩主は一斉に帰国、宏壮な江戸屋敷は空き家となって地価は暴落、屋敷にあった道具類は市中に溢れ出した。公家、諸公、華族に伝来する表道具等の指定資産に対し、第三者の所有権・質権・抵当権主張を不可能にした明治十九（一八八六）年の「華族世襲財産法」（明治十九年勅令第三四号）の発令によって沈静化するまで、収拾のつかない状況が続いたのである。

明治二（一八六九）年、明治新政府は旧江戸幕府直轄の昌平黌を大学とし、これに開成学校、医学校の二校を分局として統合、開成学校は大学南校と改称された。これは地理的に本郷にあった大学本校の南にあたる神田一橋に位置していたためである。医学校は下谷御徒町にあり、本校より東に位置するため大学東校と改称された。町田久成は、明治三（一八七〇）年大学大丞として田中芳男と共に大学南校におかれた物産局に勤務し、廃仏毀釈による文化財危機の時勢にあって「抑西洋各国ニ於テ集古館ノ設有之候ハ古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考証仕候要務ニ有之」と記したように太政官に対し、「集古館設立の献言」を発し、西洋各国にある集古館すなわち博物館の設立をもって古器旧物の保護を献言し、わが国に博物館の必要性を顕らかにしたのである。献言の要点は、一、明治維新以来、宝器珍物などが殲滅に及んでおり誠に遺憾であるため集古館を建設せよ。二、政府が集古館建設不可能のおりには、雑品にいたる物を保護する政策を講じよ。三、専任者をもって古器物を模写し、記録として集成せよ。ということである。そして、新政府の推進する殖産興業政策やウイーン万国博覧会を見越して守るべきモノを具体的に示したのが大学南校主催の物産会

（辛未物産会）である。辛未物産会は、明治四（一八七一）年、五月一四日～二〇日の期間で九段坂上招魂社境内で開催され、広く国民に博覧会の持つ有用性を謳い、一般の出品を求め、「最寄ノ物品」の品には賞を出すなどモノへの注意を喚起したことにある。出品物の売買を認めていることも古物などに金銭的価値が厳然と存在することを知らしめ、ひいては散逸、廃棄などを回避させる意図があったことが推測できる。東京国立博物館所蔵の『明治辛未物産会目録』には、部門別、出品者別に二、三四七件総ての品名が記されており、政府の出品物である官品は四六二件で全体の二割ほどで、残りの八割は四〇人を数える個人の出品物である。[8] 主催者の田中芳男は七五二件を数え、町田久成の副官として活躍した蜷川式胤、柏木貨一郎など、当時を代表する数多の好古家達がその出品物と共に名を連ねている。ここに出品者の一人としてすでに武四郎が名を連ね、「鸚鵡螺一種巨大者」と共に出品した「雷斧砥」（石皿）「雷斧鋸」（石製品）、「未成雷斧」（磨製石斧未成品）は、『明治四年物産会草木玉類石写真』（東京国立博物館蔵）に彩色挿絵で記録されている。つまり武四郎は政府が目指そうとしていた殖産興業を目途とした「博物」の啓蒙という新しい試みの最先端に好古家として選ばれていた事を意味している。

太政官は、この献言を受けて一月余りで古器旧物保護の方針を明文化し対応した。すなわち博覧会直後の明治四年（一八七一）五月二三日「古器旧物保存の布告」を発し、保護すべき古器旧物三十一種の名称一覧が添えられ、各府県には所管官庁を通じて目録を提出することを命じた。ただし、集古館そのものの建設には触れられてはいない。ここで注目すべきは、この三十一種が武四郎蒐集古物のカテゴリーのいくつかに概ねあてはまる点である。「古器旧物保存方」の三十一種の部どうしの関連性は不明ながら、具体的な品々が示された内容は、鈴木廣之が指摘しているように明治初期における好古家の蒐集対象そのものと言える。[9]

## 二　松浦武四郎の古物蒐集

「北海道の名付け親」として知られる松浦武四郎は、文化十五（一八一八）年二月六日、紀州藩領の伊勢国一志郡須川村（現三重県松阪市小野江）に紀州藩郷士松浦桂介の三男として生まれた。十三歳から津藩の儒者である平松楽斎の私塾で学び一六歳で江戸に家出した後、十七歳から二六歳に至る一〇年を諸国放浪に費やした。長崎でロシアの南下を耳にして以来、そ

の眼差しは蝦夷地に注がれ、弘化元（一八四四）年より彼の地を目指し、翌年その志を果たしたのである。その後私人として二回、幕府雇いとして三回の蝦夷地探査を敢行し、安政五（一八五九）年には、二七九名に及ぶアイヌ民族の協力を得て、蝦夷地の内陸までくまなく踏査した地勢図である『東西蝦夷山川地理取調図』二八巻を完成させた。これは、維新後の北海道の国郡名選定に反映されるなど、その価値は高く評価されている。明治二（一八六九）年には政府から正式に蝦夷開拓御用掛、開拓判官の命を受け開拓大主典の要職に就くも、翌明治三（一八七〇）年には利権を手放さない松前藩への不満と開拓使内部の腐敗を理由に職を辞し、後の人生は少年期より興味を抱いてきた古物蒐集に没頭し、数多の好古家達との交流をもって蒐集と研究に明け暮れたのである。『撥雲餘興』首巻（明治十年刊行）、『撥雲餘興』二集（明治十五年刊行）の二著は、その集大成と言える。

古物蒐集の片鱗は、天保三年（一八三二）年八月、武四郎満十四歳の年に開催された伊勢国射和村（現松阪市射和町）の延命寺で西村広林、竹川竹斎主催の物産会に師の平松楽斎と共に「紅毛銭二種」（紅毛銭とは欧州の銭貨のこと）を出品していることなどから窺える。翌年には、本居宣長が蒐集した鈴を写した図を長谷川元貞から借りて書写し「古鈴図」を著すなど既に古物好みの片鱗がみて取れる。きわめつきは、武四郎が古物購入の返済に困り、あろうことか師の平松楽斎が大切にしていた火事頭巾を勝手に持ち出し、道具屋に売ってしまう事件を起こしている。これは天保四年（一八三三）に十六歳で家を飛び出したきっかけとなった。そもそも武四郎は、「蒐集」の人である。満十五歳で記録した鈴屋の「古鈴図」をみても、モノへの執着とそれを徹底的に記録するという性分がすでに充分に発揮されていたことを物語っている。生来の癖ともいえる武四郎の「蒐集」は、開拓大主典を辞し、市井に下ってから大きく方向転換してからのように見えるが、主な蒐集アイテムがコトから再びモノに変換され、過去を顧みることを抗うようにモノの世界に没頭していったのである。

例えば武四郎が少年期より拘って蒐集した古銭に関しては、明治十年台の愛泉家番付で二番目にあがるほどであった。その実力を示す史料として元治二（一八六五）年、武四郎四十七歳の自筆稿本であり、和洋の古銭についての緻密な分析が加えられている『昌平宝鑑』や『洋貨図録』等があげられる（石水博物館所蔵）。生涯に亙って蒐めた古銭類の多くは、明治十（一八七七）年三月二十一日に大蔵省に三竿分献納した事（明

治十年三月二四日付朝野新聞）が判明している。好古家としての具体的な活動としては、明治元（一八六八）年十二月より毎月二十一日に自居で「尚古会」を開き、多くの同好の輩と交わる中で、明治六（一八七三）年頃には、すでに東京において名声を得ていた事が知られている。また遺存する資料は少ないものの奇石の蒐集家としても一目置かれる存在であった事も知られている[10]。古典籍に関する造詣も深く、蔵書に関しては神田五軒町に居を構えた明治九（一八七六）年に、東京書籍館（現国会図書館）と開拓使（現在は北海道立文書館所蔵）に納本されている。

生涯に亙って蒐集した古物は、膨大な量に及び、現在行方が判明しているのは静嘉堂、松浦武四郎記念館、前田育徳会、国際基督教大学等に収蔵されており、その内容に関しては、ほぼ把握できている。これらの資料や自書、自筆稿本等の文献記録から、古書、アイヌ関連資料を除く武四郎の古物蒐集の傾向を見ると以下のような傾向がみて取れる。

一、近代以前から続く好古家の蒐集品。例えば藤貞幹の『訪古遊記』所載の分類に従えば、珍蔵（主に古代文化資料）古典籍・古文書・古銭・古瓦・金石文・拓本・古器物（土器・勾玉・青銅器・玉器等の考古遺物）、秘玩（日用品中の愛玩品）硯・水滴・筆架・鎮子・印匣・如意・扇・書画等に匹敵し、菊木嘉保編『万宝全書』一三巻一三冊（元禄七（一六九四）年刊）に所載される刀剣類・茶道具の類は、武四郎の蒐集対象からはほぼ外れる。

二、奇石

三、信仰関連資料（神仏崇拝・天神信仰・富士・大峯信仰など）に関連する書画。（仏像・神像・天神画・観音画・甲斐の黒駒等。）

四、歴史上の人物に関連資料（聖徳太子像・坂上田村麻呂像・柿本人麿像・西行法師像等）

五、古建築の古材（一畳敷など）。

六、著名人の揮毫（箱書き、渋団扇など）。

武四郎は古物を様々なかたちで入手したが、一つには武四郎自身が主催し、明治元（一八六八）年十二月から、毎月二十一日に開いた「尚古会」やH・v・シーボルト主催の「古物会[11]」などの古物展覧会、あるいは全国の好古家との個人的なネットワークにおいて交換、売買によったものが多い。さらに、真意はさておき、武四郎の社寺関連資料に関する蒐集理念は、『撥雲餘興』二集跋文に「ただいたづらに古物好ミすと言にはあらず、我後たらんもの能我が志を汲ミ我が亡らん後一品たりとも買求ることなく、残し置る物を始宮寺坏の什物なりしは其宮寺にて保護なるべき時至らばおしまずもとの宮寺に納めまいらす

べし」と記し、自分が所持している社寺の古物は、没後には元に返すよう自身の考えをのべているように篤い信仰心がもたらす文化財保護者としての自覚が強かったことが窺える。実際、現存する稿本類[12]には、石山寺、三井寺、滋賀院、厳島神社など各地の社寺を巡っては、現品確認を行いながら宝物類や文書類の書き上げを行っている。

## 三　明治十二年の旅

明治十二（一八七九）年の旅の記録である稿本『己卯記行』は[13]、佐藤貞夫氏等によって翻刻されている。佐藤によると、この旅には四つの目的がある。第一には、明治六（一八七三）年に夭逝した愛娘一志の七回忌に、妻とうと共に高野山に日牌を納める事。第二に、大阪天満宮への大神鏡を奉納する事[14]。第三に大峯修験の聖地である吉野を訪問する事。第四には、各地の好古家を訪問し蒐集品を拝見、入手を目的とするものであった。出発から帰京するまでの行程は、第一図に示したとおり、三月十五日に東京を出発してからから五月三十日帰京するまでの七十七日もの長旅であった。この旅における好古家との主な交友関係を月毎に順を追ってその概略を記す。

【三月】

十五日。東京出発

十六日。静岡柏原学而宅[15]にて古物談義。

二十一日、二十二日。尾州知多郡小鈴ヶ谷（現常滑市小鈴谷）の盛田久左衛門命祺[16]を訪問し、多数の勾玉等を拝見。

二十五日。尾張国半田（愛知県半田市）の中埜又左衛門[17]を訪ね、勾玉、明代末期の画家黄道周の書幅を拝見。

二十六日。同地半田の小栗富次郎（生没不詳）宅を訪問し勾玉の類を拝見。

二十七日。熱田神宮に参拝し明治元年の凄まじい廃仏の様子を回顧している[18]。

三十一日。今井田（三重県伊勢市）八ツ塚で臼石（臼玉）を採集　鏡宮神社（伊勢市朝熊町）で神宝の鏡を見る。松田翁家にては、『瀋氏集古印範』七冊、『超然楼印賞』一帖、『何雪漁印海』四冊、『何雪漁印賞』一帖等を拝見。久志本より『趙志集』一巻を拝見。

【四月】

四日。京都入り。喜多院、在梅、蔵六（秦蔵六）、金森（金森弥助[19]）に会う。

五日。　知恩院大教聖を訪問し経巻数品を拝見。

六日。京都博覧会品評所[20]で古墨帖展覧を見学。

十一日。一の坂、奈良坂、般若寺、転害門、興福寺、二月堂、三月堂、手向山八幡、春日社を回り、南大門の破損を憂い、廃仏時の県令であった四条隆平（一八四一-一九一一）の暴挙[21]や明治八（一八七五）年に庭掃除の老人から廃仏希釈当時、破却された手向山八幡宮の多宝塔の部材を見せられ、建て替えのための寄付を申出るも稲生真履や鵜飼大教正などに相談したことなども聞いたがどうにもならず落胆する。

十三日。奥福寺、瑞景寺、念仏寺、不退寺、元明陵、元正陵、法華寺、秋篠寺、西大寺、喜光寺、唐招提寺、薬師寺、達磨寺、二上山山麓の当麻寺に至る。法華寺横笛堂で出土した古銭の顛末が記される。「横笛堂は今は形斗残りぬ。門前の塔の跡を多くの黒鍬共畑に墾し居たり。此処より三年前金銀の貨幣様のもの三枚と和銅銭、万年銭、神功銭五六百文出たり。今是柏木氏[22]の蔵となる。」廃仏毀釈で消滅した喜光寺を目前にする。

十四日。高田、曽我、今井から久米寺で霊宝物を拝観。飛鳥で山王石（猿石）、鬼の雪隠、鬼のまな板、倭彦命の窟、亀石、方文武陵、高松山の石墓から長谷寺へ参詣。

十七日。大坂の大峯奥駆行者である小西善導に奥駆けの相談をする。喜蔵院、東南院、如意輪寺、勝手神社、蔵王堂から六田村を経て五條に至る。

二十一日。大鳥神社の宝物を拝見。富岡百錬[23]と共に堺県令税所篤[24]を訪問し、古物を拝見。

二十二日。磯長一廟三骨の陵[25]に入る。金剛輪寺から出土した古物を知る。税所県令に明治八（一八七五）年に二月堂で呼び止められた老人の話をする。[26]堺県令に大仏殿の四天王の寄贈について話す。

二十三日。堺県令、大鳥神社を来訪し南大門の修復への尽力を提案する。勧進元に浄土宗在東京伝通院住職福田行悔[27]を推挙。

二十四日。堺の古川躬行[28]を訪問し、妙国寺、天神、戎社等参詣。

二十七日。神戸から壬生山田郷の栗花落家、車下村の鷲尾家、衝原村の箱木家[29]を訪問。

二十九日。原保太郎[30]を訪問。吉田喜平次[31]を訪問し徳本上人の遺物と同家の古物を拝見。

【五月】

一日。岡本大講義宅にて古物拝見。

二日。江戸堀船町川口淳宅で異形の壺、銅剣を見る。

三日。田中楢次郎宅にて古物を拝見。平瀬亀之助[32]宅で古物を拝見。川喜多石水[33]、他に両三人同席。

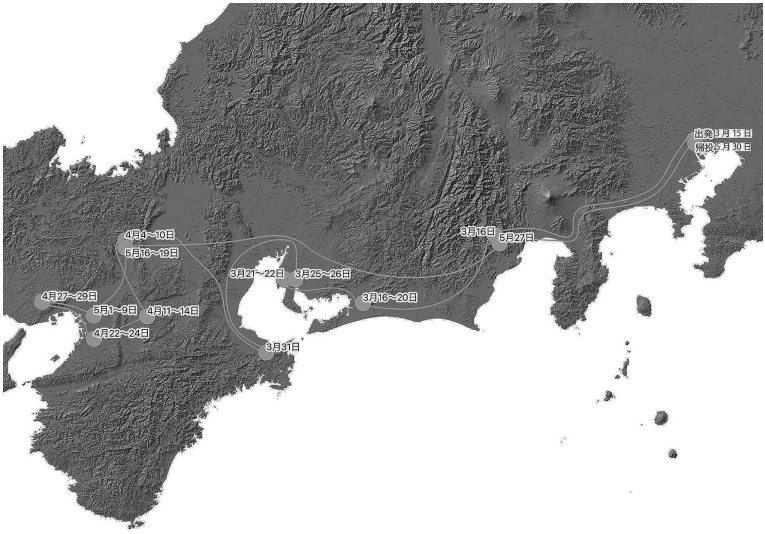


図1　明治12（1879）年　旅のルート

四日。大神鏡を大坂天満宮へ奉納。

六日。岡本宅にて古物会を開催。川口淳、田中楢治郎、西尾政次郎、高松舫州、池田快堂、小山田、佐々木、富岡鉄斎、川喜田久太夫、小原竹香、山中多助。

八日。平瀬宅で古物を拝見。

九日。高麗橋傳三郎[34]宅で古物を拝見。

十六日。京都東山尚歌堂で古物会を開催。山中静逸、畑、森川、鳩居、在海堂、桂花堂、西村、櫂庵、山田、神田、伊谷、田中、其他二十七、八人来る。

十九日。喜多茂、木屋町池（生）庄楼にて古物会開催。大坂より高松舫州、小原竹香来る。谷鉄臣、素文の壷。岡本黄石老人、素文の尊、在海堂の素文の香炉、尊。其他井谷、福井、竹角、梧庵、森川、伊勢等来る。

二十七日。静岡。柏原家で古物拝見。山中笑[35]に有竹老人来る。

三十日。帰宅。

## 四　武四郎の見た古物

この七十七日間の旅で多くの好古家との接点をもちながら様々な古物を眼にし嬉々とする一方、廃仏毀釈で被害を受けた

文化財に心を痛めた事などが記されている。ここでは日記に記録された古物の内容について新知見をまじえて整理しておきたい。

旅は東京の自宅を発し、静岡の医者で好古家の柏原学而との交流からはじまり、三月二十一日、尾張国鈴ヶ谷の盛田久左衛門命祺を訪問し、同家の所蔵する書画幅や同家を訪れていた伊勢国津の伊賀屋政右衛門、号を酔古堂という骨董家の所持する勾玉類を図示し記録している。図を見る限り、縄文時代の垂飾、弥生時代から古墳時代にかけての各種勾玉類や石製品等が認められ、古墳時代の三環鈴、三鈴杏葉や、さらに中国製の青銅製品やが図示されている。三月二十五日には、半田の中埜又左衛門家では勾玉の他に明末の画家黄道周の書幅を所蔵していることを記している。記録された勾玉は家伝の九点の勾玉と二点の垂玉飾である。また、同分家の酒造家六代中野半六が持参した勾玉と銅器を見て、

丁子頭勾玉一点と勾玉と管玉が連なる奇品の記録も残して是はとて当地にっては婦人方の簪に琅玕の小さきを金針五縁斗をも結つけたられたり。男子は時計の鎖に必ず篠玉を綴りてつけたるる有。余安ずる博物館委員なり）に尋ねしかば、今は皆蝋石の玉にとりかへ有ると。然ればその正品、此国中に散乱せしものか。如此玉の多き地は何れの国有るべくも覚えず。別て東京に於てをや

と記し、かつて神社に奉納されていた勾玉の正品が蝋石に換えられ、実物は巷に溢れていることを記述している。このように、愛知では盛田、中埜、小栗の三軒の素封家で、特に勾玉をはじめとした玉類を中心に見ている。図示されたこれらの玉類に関して静嘉堂をはじめとしたコレクションに現存するものは見いだせないものの、玉類は松浦武四郎コレクションの中心的なカテゴリーの一つである点からしても当地の好古家達は、ある程度武四郎の好みを把握しており、訪問した武四郎に敢えて玉類を用意した可能性も考えられる。三月二十七日、熱田神宮を参詣し明治元（一八六八）年の廃仏の惨状を回顧する。

四月には、京都、吉野を経て、二十日に大坂入りした武四郎は、翌二十一日、富岡鉄斎が宮司を務める大鳥神社の宝物を拝見後、富岡と共に堺県令の税所篤宅を訪問し、古物を拝見している。日記には、

午後より百錬同道。市村なる税所県令を訪ふ。令頗る古物好きにして、此宅と申もの一路居士の寓居の跡なりしと。前に溝川あり其傍に大松一株有是則居士の籬を懸けられし松也と云り。また古鏡七八面、何も漢鏡也。琅玕、勾玉

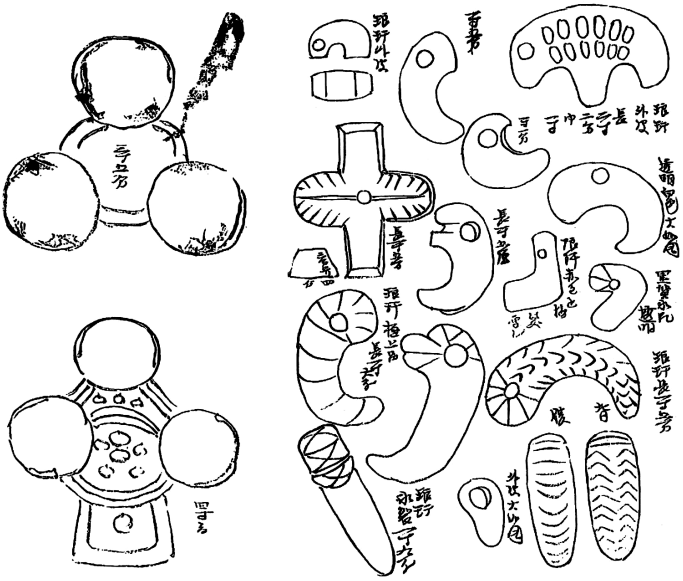

図２　３月21日・22日　盛田久左衛門命祺宅
（『己卯紀行』松浦武四郎記念館刊より）

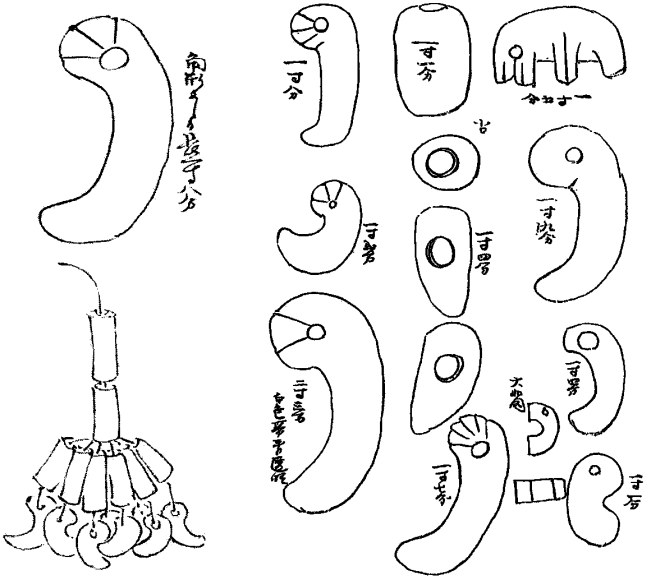

図３　３月25日　中埜又左衛門宅（『己卯紀行』松浦武四郎記念館刊より）

十二、三顆。其内五六品は実に可驚もの有。また香水壺二口、古色実に可掬也。勾玉壺、是また製作奇古、決て関東にては未だ見ざる処なり。其内五六品を次に図し置ものなり。然るに明日は、河内国磯長一廟三骨の陵を、内務省諸陵局の大沢と云人展見として開かるゝよし聞に、我等にも行くとすすめるに預り、約て帰る。夜一時頃に及。途上菜花の香紛々たり。此道すじを信徳街道と云るよし。

と多数の古物が記録されている。この挿図に描かれている左下の歯車状の石製品に注目したい。添え書きには、「河内國安宿郡国分村松岡山堀出し　石質は緑色玉造石車輪石二枚三十四切四寸六分　二十切四寸七分　径七寸二分　穴厚五分なり」とある。これは、現在藤田美術館が所蔵している歯車形碧玉製品（重要文化財）そのものであり、簡易ながらも武四郎の手によって図として記録された初出として位置づけられる。この歯車形碧玉製品が、藤田美術館に入るまでの顛末については、徳田誠志がその詳細を報告しており（36）、現在国内で確認出来る資料は僅かに二点のみの極めて貴重な遺物である事が判明している。出土の経緯と来歴については、明治二十（一八八七）年に神田孝平が『東京人類学会報告』「雑記」に挿図を添えて報告[37]しており、所有者は「議官税所氏」であり「時辰儀の歯輪ニ似タリ」であるが、用途は不明、出土地は「河内國安宿（部）郡國分村松岡山ノ古墳ナリト云」としている。つまり、武四郎がこの歯車形碧玉製品を見てから八年後に神田孝平によって考古学界にはじめて紹介されたのである。その後、大正四（一九一五）年に梅原末治が、松岳山古墳全体の調査を実施した際、地元に残されていた記録から当時堺県の役人であった沼田龍によって明治十（一八七七）年十月「東ノ大塚」（ヌク谷東ノ大塚古墳）から発見され、上司であった堺県令の税所の元に届けられたものであることが判明したのであるが、梅原自身現物は眼にしていなかった。その後の顛末は不明ながら昭和二十六（一九五一）財団法人として設立された藤田美術館において実物と対面し、その感激を記録している[38]。同資料の明治二十年から昭和二十八年までの具体的な動行は不明ながら、税所から藤田傳三郎[39]の手に渡った結果である。

二十九日には、原保太郎を訪問後、吉田喜平次宅を訪問し、徳本上人[40]の遺物と同家の古物を拝見している。日記には、

余に我が首に懸たる勾玉の事褒められて、我に古物を好むかときめわれしば、余卿か数寄の趣を以て御当家御蔵品は兼て聆涛閣帖に拝見していつか一度拝見もがなとれば二、三品をばと頼入れしかば、容易に第一、応神天皇の木造、

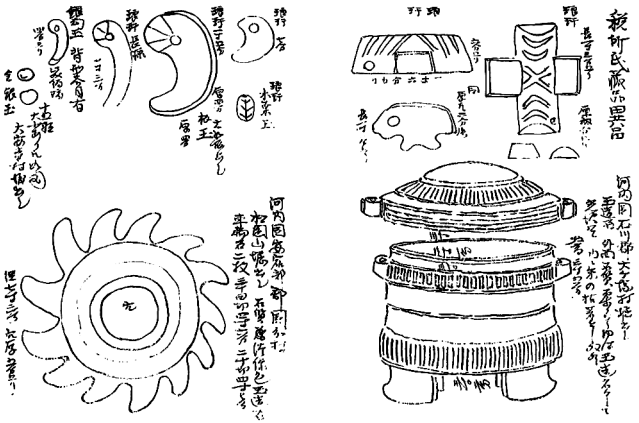

図４　４月21日　税所篤宅（『己卯紀行』松浦武四郎記念館刊より）

写真１　歯車形碧玉製品
（重要文化財　藤田美術館蔵）

聖徳太子勝曼経御講讃の御影、釈迦三尊の幅、不動二童子の幅、如何にも結構なり。伯耆大山堀出しの八菱鏡、隙なくして見逃也。雷斧、雷槌は西国に少き物故是尋常、さして可賞品ならず。可驚は図する如き琅玕の勾玉なり。実に異形と云うべし。銅剣よろし。余が剣と大きさも古色も同じ。鳳雀頭、鬼面の剣、面さしての品になし。天冠、唐八菱鏡、土鏡、経瓦等は随分有る物也。八乳四神鏡、和鏡等何も尋常の物也。五鈴鏡、八幡堀出しの車輪石、缶、十字鈴、几帳鈴、何れも別品なり。其外可書田天部、古暦等有。

土馬の事を聞しかば、是は神田県令にかし置しが、未だ帰されざりしと。

とあり、ここに記された聆涛閣帖とは、吉田家三代の蒐集品を記録した図譜である『聆涛閣集古帖』（国立歴史民俗博物館蔵）であり、同図譜には、同家の蒐集品に限らずさまざまな古い器物を「天地・尺量・升量・扁額・文房・肖像・書・碑銘・墓誌・鐘銘・雑銘・甲冑軍営・弓矢・刀剣・鋒・馬具・楽器・印章・鏡・織紋・乗輿・玉・食器・食品・葬具・調度・嚢匣・瓦・鈴鐸・戯器・仏具・雑」に分類し、全四六帖に総計約二四〇〇件を収録するとともに、他に二十点ほどの肖像画・絵図の未表装模写が付属している。つまり武四郎は、既に吉田家所蔵の古物についてこの図譜から学んでいたことが理解できる。さらに、そこで見た「土馬の事」について尋ねたところ「神田県令にかし置しが、未だ帰されざりしと」記録されている。ここに記された「土馬」とは、現在関西大学博物館の所蔵になる馬形埴輪のことであり、これは神田孝平[41]の旧蔵コレクションを包括する本山彦一[42]の旧蔵コレクション（登録有形文化財）が関西大学博物館に収蔵された結果である。つまりこの「土馬」は、吉田家から当時兵庫県令であった神田に貸し出され、武四郎が訪問した明治十二年の段階では吉田家には帰っておらず、そのまま神田の手許にあった事を意味する。この「土馬」の旧蔵者が近世難波の知の巨人である木村兼葭堂[43]であった事を含めて、一連の顛末は徳田誠志によって紹介されている[44]。

また、挿図左下に描かれ「大国布留堀出」と記録された琴柱形石製品も注目すべきものである。これも旧神田孝平の旧蔵品であったことが明らかにされており、神田没後古美術商を通じて本山彦一の手に渡った事が知られている[45]。『己卯記行』の挿図に描かれた形状、大きさ（「長三寸四分」一〇、二九センチメートルで、現物は一〇、三センチメートル）からしてもほぼ合致するものである。つまり、この琴柱形石製品も吉田家から神田の手に渡った可能性が高い古物と言えよう。現物は、良質な碧玉製で、形状は「Y」字形を呈し二本の横軸が貫ぬいて、下軸には二箇所に小孔が穿たれており、底面にも小孔が認められる。出土地は不明ながら同形状のものは奈良県天理市石上神宮禁足地から出土している重要文化財指定を受けている資料と極めて類似するものである。

五月に入り、一日には岡本大講義宅にて陶器、土鏡一面、土面を、二日には川口淳宅にて異形の甕と銅剣を見る。三日には、煎茶道花月庵流家元の田中楢次郎宅にて勾玉などの古物を拝見。平瀬亀之助宅で、青銅氷花鑑（六寸九分）、八卦十二辰鑑（四

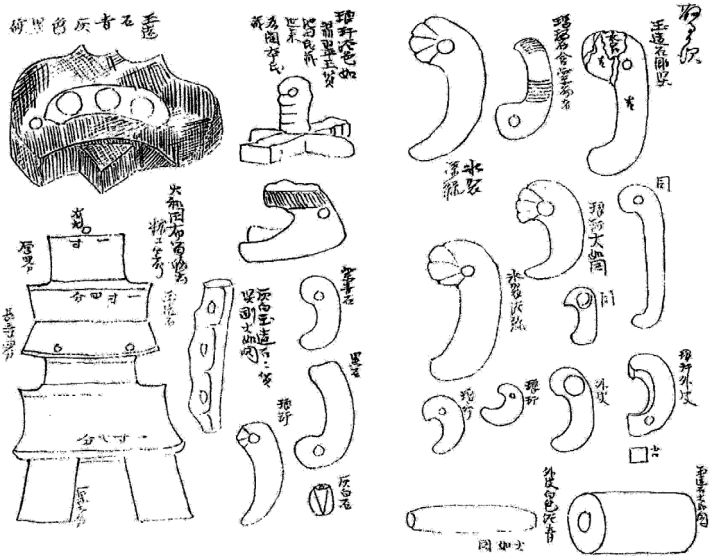

図５　４月29日　吉田喜平次宅（『己卯紀行』松浦武四郎記念館刊より）

写真３　馬形埴輪
（関西大学博物館蔵）

写真２　琴柱形石製品
（関西大学博物館蔵）

寸八分）、四神鑑、中錆四乳鑑（五寸）、四乳大鑑（七寸九分）、葡萄海獣鑑（四寸九分）、湖方長鑑、海獣鑑（四寸八分）、唐双鸞鑑、唐鳥、雁花枝鑑、十乳鑑、同四乳鑑、氷華長宜子孫鑑、破鏡、此他九面各奇古可愛物也、盉（孔花流）、匣、壷鐘、余琅玕、勾玉十二個を拝見。六日は、岡本宅にて富岡鉄斎や川喜田久太夫を交えて古物会を開催するなどし、九日には、高麗橋の藤田傳三郎宅で古物を見る。ここで明治十一（一八七八）年、岐阜県下で掘り出された石製摸造品や玉類などの古物が県の許可なく持ち出されたとの疑義を藤田の機転で事なきを得た逸話を次のように伝える。

高麗橋伝三郎え山中多七と同道。此家にて去年（明治十一年なり）美濃国赤坂の上なる山にて掘出す処の物を多く取入れしを見たり。古破鏡五六面、鍬石一、我が蔵するより厚し。石質は同じく長六寸四分、車輪石五寸六分。是また世間無比の物也。其外種々の神代古物、近年如此堀出せし処なり。また勾玉壷二つ、奇品の勾玉二つ。銅鏃数多し。此処斎甕等多く出たりとまた近頃取入になりしと。爵、青蓋鏡等を見せらる。当家の壮大実に三都第一と云べし。扨此美濃堀出の古物、畑の所有は県え届けなく、京指屋にて売払しが故に此事吟味になり、其買主を大坂より呼て調被成、一端は取上にもなる評判有りし処、或日警察局にて坂地道具やを呼出し、右品は岐阜県より届なくて持出せし故、一統警察局えさし出せと申渡せしや、藤田伝十（三）郎手代右物持参して、委細略書して御座候えば右品御改の上預り書を被下候申出し処、警察にて預は遺しがたしと。其手代承知せず、此品名盗品と申義にも無候間、是非被下候様申立る処え渡辺知事行かれて、此品何も預り候には及まじ。金円等ならば火盗の難有どもつぐなふ事出来るとも、如此品は償ふことなりがたし。依て此方に何か品有るよし岐阜県え答て遺しければ決て預り書等出し、預り置等致す事無用とて、此事内々たりとかや。藤田伝三郎、壮なる時の勢なればなるべしと市中一同の道具や共藤田の答にて大にたすかりし也。

十六日から十九日にかけては京都で古物会を開催した後、二十七日には往路でも寄った静岡の柏原学而宅にて山中笑などと再度交流し、三十日に帰宅。この七十七日間の長い旅を終えたのである。

## おわりに

以上、松浦武四郎が、妻とうと共に明治十二（一八七九）年三月十五日から五月三十日に至る七十七日間の旅で接した人とモノについて、『己卯記行』に記された内容からあらためてその交友関係と、古物のやり取りを通じたネットワークについて整理した。また、熱田神宮や東大寺における廃仏毀釈当時の追憶から武四郎の信心の篤さに加え、身銭を投じて護ろうとした文化財についても知ることができた。明治二十（一八八七）年まで毎年綴られたこれらの稿本類は、静嘉堂や松浦武四郎記念館に残された古物コレクション形成史にかかる貴著なアーカイブであり、市井における文化財のあり方についても具体的な事実関係を提示する重要な史料でもある。さらなる読み込みを通じて、詳細な内容をあきらかにする事の必要性を感じている。特にそれぞれの文中に記され、今日資料が確認できる古物に関するやり取りが各所に記載されており、引き続きその詳細を明らかにしていくつもりである。

本稿を執筆するに際し、近代博物館形成史研究会の面々、とりわけ徳田誠志氏、鎌形慎太郎氏にお世話頂いた事を記して深

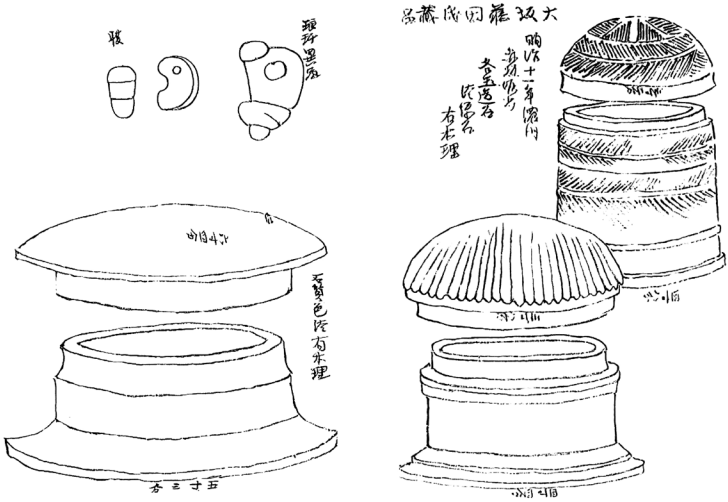

図６　５月９日　藤田傳三郎宅（『己卯紀行』松浦武四郎記念館刊より）

謝する次第である。

**註**

（1）内川隆志編 二〇一五『静嘉堂文庫蔵 松浦武四郎蒐集古物目録』

（2）公益財団法人静嘉堂 二〇一三『静嘉堂蔵　松浦武四郎コレクション

（3）國學院大學博物館　二〇一六『國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ二〇一五　博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究報告書』。発表者、テーマは以下のとおりである。アン・ニシムラ・モース（ボストン美術館、アメリカ）「ダブル・インパクト：博物館の国際化と日本」、サイモン・ケイナー（イーストアングリア大学日本学センター、イギリス）「ギャラリーの超越：ハイパー空間の土偶―新メディアと博物館」、マティ・フォラー（ライデン国立民族学博物館、オランダ）「国立民族学博物館の日本コレクション」、ミシェル・モキュエール（ギメ美術館、フランス）「ギメ国立東洋美術館（パリ）、そのコレクションの歴史」、アレクサンダー・シニーツィン（ピョートル大帝記念　人類学・民族学博物館クンストカメラ）、ロシア）「ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館日本コレクションの概要」、ヨハネス・ヴィーニンガー（オーストリア応用美術博物館）「博物館の未来はデジタル化だけではない」、クリストフ・マルケ（日仏会館）「フランスの図書館や美術館の和古書コレクションと日本文化研究」、イローナ・バウシュ（東京大学）「オランダ におけるシーボルトのコレクションの日本考古学遺物について」、宮崎克則・阿部大地（西南学院大学博物館）「西南学院大学博物館とシーボルトの収集品」、内川隆志（國學院大學）「欧州における日本コレクション形成の一視点―H. V. シーボルトと明治初期の好古家たち―」、三宅秀和（永青文庫）「永青文庫と日本国外の博物館との連絡と、その問題点について」、岡崎礼奈（東洋文庫）「東洋文庫ミュージアムにみる歴史資料展示の可能性と課題」、山﨑妙子（山種美術館）「グローバル化を見据えた近年の取り組みについて」

（4）内川隆志編　二〇一八　『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅰ　平成二九年度科学研究費助成事業　基盤研究B　課題番号　17H02025

（5）内川隆志編　二〇一八　『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅱ・Ⅲ　平成二九年度科学研究費助成事業　基盤研究B　課題番号　17H02025

（6）現在、佐藤貞夫氏の編集による『己卯記行』（明治十二年、『庚辰紀行』（明十三年）、『辛巳紀行』（明治十四年）、『壬午遊記』（明治十五年）、『癸未溟誌』（明治十六年）、『甲申日記』（明治十七年）、『乙酉紀行』（明治十八年）の七冊が松浦武四郎記念館から刊行されている。

（7）柴田道賢一九八八『廃仏毀釈』公論社 一二二-一一五頁

（8）鈴木廣之　二〇〇三　『好古家たちの19世紀』吉川弘文館　一二一頁

（9）註（8）四一-四三頁

（10）山本命　二〇〇七　『北海道の名付け親　松浦武四郎　アイヌ民族と交流した伊勢人の生涯』伊勢の國松阪十樂　五九-六〇頁

（11）明治八（一八七五）年十二月六日、H・v・シーボルトが会主として初めて開催した「古物会」の広告には、補助として松浦馬雨齊（武四郎）の名がみえる。（※雨は角の誤り）

廣告

知識を廣むるには古今の物品を探ぬるにしかず茲に予が性古代物品を愛玩するを好み数年輯蔵する品少しとせず故に今回諸友と謀り一筵を弊屋に開き古今物品を陳列し是を同好諸君に質し各其意見説論を聞き相俱に知學の一助せんとす幸ひ庭中の樹々も紅を催し富士の嶺も白を

戴き品川沖には小春の汗日和に漁する舟も
手にとる如見え眺望も亦一興なれば各君一物を御携へ且御遠慮なく御
知己御誘ひ本日御来臨御衆評あらん事を希望す
第七大區五小區上大崎四十七番地　元松平主殿頭邸にて
會主　ヘンリー　ホン　シイボルト
輔助　蜷川胤式（ママ）古筆了仲　西村喆叟　松浦馬雨齊（ママ）樋
口　趨古　横山　月舎
玉川齊　柏木探古　愛古堂磬翁　栗本鋤雲　金澤蒼夫
十二月六日早天より開筵
午後四時閉筵　但晴雨不論

（12）同註（6）

（13）佐藤貞夫によると稿本『己卯記行』九八丁の内容は、武四郎自筆のもの三冊からなり第一冊は、外題「己卯記行　天」、内題「己卯記行一の巻／尚古杜多とも云る也」で三六丁。第二冊は外題「己卯記行　地」内題「己卯記行二の巻／一名尚古杜多」で二七丁。第三冊は外題「己卯記行　人」内題「己卯記行巻の三／一名尚古杜多とも云」で三五丁。

（14）武四郎は菅原道真を信仰しており、明治八（一八七五）年に北野天満宮に直径一メートルの大鏡を奉納したのを皮切りに、明治九（一八七六）年には上野東照宮、明治十二（一八七九）年に大阪天満宮、明治十三（一八八〇）に金峯山寺蔵王堂、明治十五（一八八二）年に太宰府天満宮に大鏡を奉納。その後も明治十八（一八八五）年までに、道長にゆかりの深い天満宮二十五社に直径三十センチメートルの小型鏡を奉納。明治十九（一八八六）年には「聖跡二十五霊社順拝双六」を刊行し、道真の事績ならびに二十五社の天満宮を紹介している。

（15）柏原学而（一八三五-一九一〇）。天保六（一八三五）年讃岐高松藩医の家に生まれる。緒方洪庵、石川桜所に学び、元治元（一八六四）年、徳川慶喜の侍医となり、維新後も慶喜にしたがって駿府（静岡市）に移り、同地にて開業した。名は孝章。字は子成。号は屋山。著作に「耳科提綱」などがある。古物の蒐集を趣味としたため東海道をしばし往来する武四郎との交流も盛んで、来泊してはその指南を受けていた事実が。『己卯記行』の他に、明治十三（一八八〇）年の『庚辰游記』と明治十六（一八八三）年の『癸未溟誌』にも記録されている。学而の一族には東京大学で人類学講座を開講した坪井正五郎（一八六三-一九一三）もおり、銅鐸などの考古遺物に興味を示し夥しい数の遺物を秘蔵していたのも武四郎や縁者である坪井正五郎の影響があったからであろう。

（16）盛田久左衛門命祺（一八一六-一八九四）は、半田の酢、清酒、味噌、溜を江戸で商い、加えて回船業、木綿店を経営するなどし、明治以降は醤油醸造業をはじめた。事業を拡大する一方、天明の飢饉時には兄英親と協力し、村人を救済、海岸道路整備や白山神社改築にも多額の寄付をするなど公共事業にも積極的であった。学校制度が発布されると小学校の設立にも全面的支援を始め、その後高等小学校にあたる私塾「鈴溪義塾」を創設し、優秀な人材を輩出した。この盛田家は、ソニー創業者盛田昭夫の実家で、盛田昭夫は第十五代久左エ門にあたる。

（17）中埜又左衛門（一八五四-一八九五）は、中野又左衛門家の四代目。小鈴ヶ谷の醸造家盛田家の分家より養子に入り、中野を中埜に改名し、ミツカンの商標を定めた。甥の盛田善平と丸三麦酒醸造所を設立しカブトビールを創業した。現ミツカングループの創業家である。

（18）佐藤貞夫編　二〇一五『己卯記行』松浦武四郎記念館　二十四-二十五頁
明治元年辰三月征東の官軍、当駅え着に成りしや、祠官鈴木某、大勢の社人等を集め、此度王政御一新に成るに付ては、総て宮中に仏法くさき物は一品も無様にせばやとて、当宮に小さき観音堂の有を取払

致よし。橋本三位公にはそれしきの事驚かるまじ御政道になるや。三間四面の宝庫を開き此中に充々たる伝教大師、行基、弘法、其余世の高徳の僧侶、并に公家、名将方の写経等、経紙、金字なる物を取り出して、是を焼て、其金を分析されしが、二百八十円とやら有しと。其内に菅相公の紫切とかいへる法華経の五の巻とや、一々取除けたるに、其年七月末つころ鈴木某は狂気して死し、其石灯ろうを取除けし鳶の者といへる十五人の雇人は、大鳥居の修復時に笠石に打れて皆疵を負ひ、其より漸々病重りて死去し、大宮司某は宮の社領を何か偽て書上したるにて切腹したり。是にか、わりし者共一人も残りなくなりしぞ、不思議とも怒るべしとも譬えるものなく、それ等の事にてか大灯ろうも元の如く県より建られしと。実にかく有たきことにぞ覚ゆ。

(19) 金森弥助は、金工家で武四郎が明治八年北野天満宮、明治九年上野東照宮、明治十二年大阪天満宮、明治治十四年吉野金峰山蔵王堂、明治十五年太宰府天満宮に奉納した大鏡五面の大鏡と「聖跡二十五霊場」に奉納した小神鏡を鋳造した。一畳敷の書斎普請時には「聚楽第門扉」を提供している。

(20) 京都博覧会は、明治四（一八七二）年西本願寺で開催された博覧会を機に、京都府と民間による京都博覧会社が設立された。明治五年には西本願寺・建仁寺・知恩院を会場に第一回京都博覧会が開催され、昭和三（一九二八）年まで続いた。会場は明治十二（一八七九）年当時の会場は大宮御所・仙洞御所、明治十四（一八八一）年〜）三十（一八九七）年は京都御所内に常設された博覧会場が用いられた。

(21) 第一次奈良県令当時、興福寺の築地塀撤去や五重塔の撤去を企てるなど廃仏毀釈を強引に推進した。「廃仏知事」の異名をもつ。

(22) 柏木貨一郎（一八四一-一八九八）。幕府普請方として九代柏木家を継ぐ。古今の工芸に精通し、維新後は日本建築を生業とする一方文部省に勤務し町田久成を支えた。松浦武四郎との交流は『撥雲余興』首巻に挿図を描くなど古物の交流を通じて親交が深かった。古銭蒐集家としても名高い。

(23) 富岡鉄斎（一八三七-一九二四）。明治、大正期の文人画家、儒学者で、維新後の三十代〜四十代中頃まで税所篤の推薦により大和石上神社や和泉国大鳥神社の宮司を務めた。この時鉄斎四二歳。

(24) 税所篤（一八二七-一九一〇）。薩摩藩士として禁門の変、長州征伐で活躍。新政府では内国事務権判事、次いで河内・兵庫・堺・奈良など、大久保の推薦を受ける形で、当時まだ政情不安定であった西日本各地の県令・知事を歴任した。堺県知事・県令時代には、県師範学校・医学校・病院・女学校・堺版教科書の発行など教育行政や、堺灯台の建造など港湾改修、紡績所・レンガ工場の建設、堺博覧会など商工業振興のほか、浜寺公園、大浜公園、奈良公園の開設など先進的な県治を行った。堺県令として多くの治績をあげ、堺県の経済振興と福利厚生の充実ぶりは他県の模範とされた。一方、古物に精通しており好古家との交流も盛んで、堺県令時代には大鳥大社の大宮司に富岡鉄斎を推薦したり、奈良県知事時代の明治二十一（一八八八）年六月には法隆寺宝物調査の途次であったフェノロサを浄教寺の本堂に招いて講演を依頼するなど、文化政策に非常に熱心であった。また、蒐集熱のあまり、古墳盗掘などの悪評も多い。

(25) 磯長山叡福寺（大阪府南河内郡太子町）にある叡福寺北古墳（磯長墓）。聖徳太子は推古天皇二八（六二〇）年この地を墓所と定め、翌年母穴穂部間人皇女が没しここに葬られた。さらにその翌年には太子と后の膳部菩岐々美郎女が追葬されたと伝えられている。明治十二（一八七九）年四月二十二日、武四郎、税所、鉄斎の三人は宮内省御陵掛の大沢清臣（一八三三-一八九二）と共に廟内に入り鉄斎が見取り図を残している。

(26) 佐藤貞夫編　二〇一五　『己卯記行』松浦武四郎記念館　九十九-

一〇一頁

早天手向山八幡宮に参詣。其より二月堂に参る。未だ会場にも不相成より其辺散歩致せし時に、七十余の老人庭を掃き、木陰に縁台を置き、是に朝茶の小瓶を持来し、我が散歩せしを見て我が国を聞。彼是四方山の話を致して二月堂の下、俊乗堂の軒、大仏回廊の傍等に家材の多く積有を其ゆへを問ひしに、老人答えていえるに是は八幡の大塔今後神仏混合御禁じに付毀れたれるを、百円の金を以て、当所より買受、淀川橋まで出し置かば、日々乗船の上りの者二、三本づゝ皆木津の渡し場に持来り、陸上げ致しをまた日々の駄賃馬、当所え運び呉たる成。依て是を幸に当社は多宝塔の地礎も有之候間、右の建築仕候と信者一同懸り候へば、県庁よりさし留られ候。依て此処に空しく貯置る由申に付、左候はゞ凡其開金何程にて出来候哉申候に、凡三千円と申候由。故に我考ふる処、是三千円と申候て五千金は懸るべし、五千円にて出来候。何卒一事には再建致し度ものと申せしに、老人曰く五千円の金子には決て寄付人も可有り候得ば、奈良県にて此事相拒み候て不出来由。余曰く奈良県にて拒み候はゞ東京にて何とか工夫も可有。とにかく再会も暇を乞て場中に到るに、県の中属稲生直護に此事を談ずるに、其頃にては拒みも仕候得ども、当時にては決て右より曳、拒み候者無し。もし御意有之はゞ、凡の積り方致し見仕はんとの義に付分れ、帰府候処、後、稲生氏よりの便に、五千円に候はゞ大丈夫再建出来候也との義にて尚又亥年年再会調を大工方に積り書催促致し、我も金円催可有。蔵銭を朝廷に献納一千二百円頂戴、其上是丶にと五千円の工風相付居候処、其年秋に及、木材追々博覧会の檻、足場等に遣い紛失致し、種々の入用書上五千八百円に九輪の代価、銅にて千円、鉄にて七百円、其外地所等云に凡一万円にも相成候由、積り書参候間左様に候はゞ。全くの仕上げは凡一万五千円も懸り候由との義に付、右積書を知恩院徹定教正に見せ、当時東大寺は知恩院の配下にも相成候事故、何卒此事教正御発起にも相成候へば、私義五千円の金子奉納度仕度由申候に、教正其節は大に悦び、左候ば必ず再建可致と諾約有。其後しばらく過ての言に右大塔、東大寺に再建被存候へ共、知恩院に塔無が故に右をとり相致し、知恩院に取よせ立度由被答候。依て我いへらく知恩院は何ぞ我等の奉施を仰給ふ事あるべからず。其末流一万余寺にも及。一ヶ寺直末一円づゝ寄付を被仰付候はば、右大塔再建なるべし。東大寺こそ無檀、無末寺にて今は無礎、依て私の微力ものたりとも、浄貨奉納も可仕御懸に有んと申す。其後尚又奈良の方へ様子聞合せ候処、右材追々《脱》（俊乗）坊堂には売払、今は纔博覧会にて置場等に遺有候材木のみ残り居候と申越、其残念やる方なかりし也。此材木纔一年不満にして何れへか行。是は激定教正より此事を《脱》寺に問合せに成し故に、もし此塔材を知恩院に取返候はゞと存候て、《脱》（俊乗）坊売払ひしとの風聞なり。

(27) 福田行誡（一八〇九-一八八八）。武蔵国豊島郡の生まれ。明治政府が断行した廃仏毀釈に対して、諸宗の僧と同盟組織をつくり、仏教の擁護と僧侶の自粛を主唱した。のち浄土宗管長を務め、縮刷大蔵経の刊行にも尽力した。著書に「雪窓答問」などがある。

(28) 黒川真頼（一八二九-一九〇六）と共に黒川春村（一七九九-一八六七）の『考古画譜』考証改訂し、『増補考古画譜』として完成させた。維新後、大阪府枚岡神社、奈良県大神神社などの大宮司を歴任した。著作として『散記』『喪儀略』『鳴弦原由』が知られる。

(29) 兵庫県神戸市北区山田町衝原にある歴史的建造物。日本最古と推定される民家の一つで、国の重要文化財（指定一九六七年六月十五日）。「はこぎせんねんや」の通称で知られる。室町時代建立の主屋、江戸時代建立の「離れ」の二棟が重要文化財に指定され、他に築山、中庭、納屋、土蔵等が現存する。主屋の松材柱六本の放射性炭素年代測定によると一二八三-一三〇七年頃に伐採された木が使われていることが判

明している。

(30) 原保太郎（一八四七-一九三六）。園部藩士、原官次の三男として生まれる。江戸練兵館で剣術を修行し、練兵館塾頭になるも、園部藩を脱藩し京に上り、岩倉具視の食客となる。戊辰戦争では、東山道総督随行、上野国巡察使兼軍監として従軍。維新後、アメリカのラトガーズ・カレッジ、イギリスのキングス・カレッジ・ロンドンで学ぶ。帰国後、兵庫県少書記、同県大書記官、山口県令などを歴任し、明治十九（一八八六）年に初代山口県知事に就任。その後福島県知事、北海道庁長官、農商務省山林局長兼林野整理局長、貴族院議員を歴任。

(31) 吉田家は、摂津国菟原郡住吉村呉田（今の神戸市の東部）にあった酒造を生業とした素封家。

(32) 平瀬亀之助（一八三九-一九〇八）。大名貸しで知られる千草屋に生まれ、後に第三十二銀行、阪急電鉄などを組織するなど大阪財界の重鎮であり、露香と号し茶や和歌をよくした。

(33) 川喜田石水（十四代久太夫政明・一八二二-一八七九）は津の商家、木綿問屋川喜田家の当主を務める傍ら、本草学や和歌、茶の湯などあらゆる趣味を極めた知識人として知られ、川喜田半泥子（一八七八-一九六三）は孫。武四郎と石水は幼少の頃、津藩の儒学者平松楽斎の私塾で出会い、親交は晩年まで続いた。

(34) 藤田傳三郎（一八四一-一九一二）山口県生まれ。大阪財界の重鎮であり藤田財閥の創設者。高杉晋作に師事し、木戸孝允、山田顕義、井上馨、山縣有朋らと交遊関係を結んだ。維新後、大阪に出て革靴製造業を始め、明治十（一八七七）年の西南戦争で三井、三菱と並ぶ利益をあげ、地盤を固めた。その後建設業、紡績、鉱山、電力、鉄道経営などの多角経営によって財閥を形成した。藤田が蒐集した美術品は大阪市都島区網島町の旧藤田邸跡にある藤田美術館に国宝九点、重要文化財五十一点を含む数千点の美術品が収蔵されている。

(35) 山中笑（一八五〇-一九二八）明治元（一八六〇年）徳川家が戊辰戦争後、徳川家と共に駿府に移住。そこで、旧幕府の学問所静岡の英学所賤機舎の英学教授となった。明治14（1881）年東洋英和学校神学科を卒業後再び静岡に赴任し、同年9月東京の下谷教会で按手礼を受け、日本メソジスト教会教職試補に任命される。明治十五（一八八二）年には正式にメソジスト最初の牧師の一人となった。同年十月静岡玄南横丁（呉服町）に静岡教会を献堂した。明治十九（一八八六）年には、山梨県甲府教会の牧師となる。共古は甲府教会や結城無二三の開いた日下部教会を拠点に山梨県内各地で伝道活動を行う一方で庶民の生活史を見聞し、その成果を『東京人類学会雑誌』へ発表するなど民俗学者の顔をもつ。後に柳田国男などとも親交を結んだ。

(36) 徳田誠志二〇一五「藤田美術館蔵　歯車形石製品について」『河上邦彦先生古稀記念検定論文集』六一書房

(37) 神田孝平一八八七「雑記」『東京人類学雑誌』第十四号

(38) 梅原末治一九五三「河内国分出土の異形碧玉製品」『考古学雑誌』第三十九巻一号

(39) 藤田傳三郎（一八四一-一九一二）藤田財閥の創始者で、建設、土木、鉱山、電鉄、電力開発、金融、紡績、新聞など今日につながる多数の名門企業の前身を築いた。美術品の収集家、慈善事業家、数寄者としても名高く号を香雪と称す。藤田のコレクションは、絵画、書跡、陶磁器、青銅器、彫刻など多岐にわたり、国宝曜変天目をはじめ、国宝9点、重要文化財51点を含む。藤田美術館は昭和二九（一九五四）年に開館している。

(40) 徳本上人（一八五八-一八一八）は、紀伊国日高郡の生まれ。江戸時代後期の浄土宗の僧侶で、徳本行者とも呼ばれ二十七歳で出家し、木食行を行った。江戸小石川伝通院の一行院に住い、庶民に十念を授けるなどし人気を博し関東はもとより北陸、近畿に及んだ。

(41) 神田孝平（一八三〇-一八九八）。幕末維新期の洋学者、啓蒙思想家、高級官僚。漢学、蘭学を学び蕃書調所教授方手伝として数学を教授。維新後は新政府に出仕し、明治三（一八七〇）年に起草した「田租改革建議」は地租改正に大きな影響を与えた。明六社にも参加し、兵庫県令や元老院議官をつとめ『経世余論』等、経済学の領域の業績の他に、考古では数多の好古家と交流し、東京人類学会会長として全国に視野を拡げた考古遺物の蒐集を敢行、其の学術的成果は『日本太古石器考』等の著作としてまとめられた。

(42) 本山彦一（一八五三-一九三二）。明治四（一九七一）年慶應義塾に学び、大阪新報社、時事新報社、神戸師範学校長、藤田組支配人等を歴任、明治二十二（一八八九）年大阪毎日新聞社の経営に参画し、明治三十六（一九〇三）年社長に就任し、その発展に尽くした。本山氏に神田コレクションをとりなした人物は、福沢諭吉（一八三五-一九〇一）であったと言われ、その後河内国府遺跡、備中津雲遺跡、長門長府をはじめ各地の蒐集品も加えられ自邸に「富民協会農業博物館」を設立した。その整理の任についたのが関西大学との縁を結んだ末永雅雄（一八九七-一九九一）氏であった。

(43) 木村兼葭堂（一七三六-一八〇）。元文元（一七三六）年、大坂北堀江の酒造家に坪井屋生まれ、名は孔恭、字は世粛、号は巽斎、通称坪井屋吉右衛門と名乗った。十六歳で京都の本草家、津島恒之進（一七〇一-一七五五）や小野蘭山（一七二九-一八一〇）の門弟となり本草学を極めた。酒造業のかたわら画業や詩歌等様々な学芸活動を行い、飽くことのない学術世界の追求者となった兼葭堂は、その考証のために様々なモノの蒐集を行っている。万巻に及ぶ書籍はもとより内外の書画・金石・貨泉・古物など様々な分野に亘っており、蒐集品を用いた多くの著述作もまた博物学史上重要な位置を占めている。時には学術研究の為であらば自邸の門戸を開きその活用を促した。

(44) 徳田誠志二〇一九「関西大学博物館所蔵　木村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪について」『阡陵』七九

(45) 徳田誠志二〇一三「神田孝平から本山彦一へのバトンリレー　本山コレクションの来歴」『阡陵』六六